人と人との関わりを大切にした「人間」の学習

複式高学年・複式低学年
「いっしょにあそぼう～色ぼうを使って～」の実践を通して

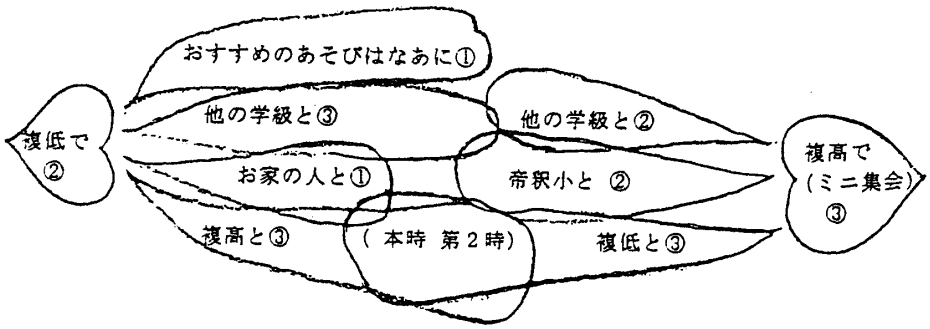
松浦武人・佐和真由美

(1) 主題について

複式学級では，縦割りのグループを作って複式学級全体の行事等を行っている。低学年は，優しく自分たちをリードしてくれる高学年と共に活動することを楽しみしている。それは，安心して自分を出すことができるからであろう。一方高学年は，年下の子に向けるまなざしが暖かく，自分のことよりも低・中学年の立場や気持ちを考えて行動しようとしている。一緒に遊ぶ時でも，直接身体が触れ合う遊びでは，同じ傾向が見られる。

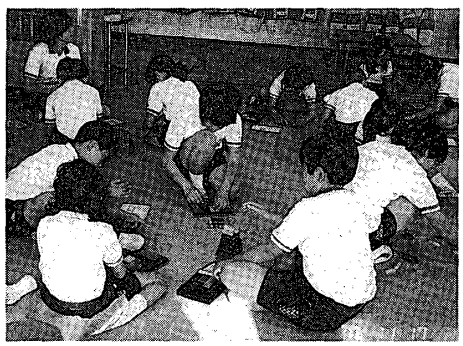
そこで，今回は色棒を通して遊ぶ場を設定した。ここでは，学年の差を越えて，色棒をいろいろに組み合わせてひとつのものを共に作りだしていく楽しさを味わうことができるであろうと考えたからである。高学年は，低学年だからこそ豊かに表れる想像力や創造性に接し，自分の考えをより深めていく楽しさを味わうことができ，低学年も，自分の思いを受けとめてもらえ，その思いが形となって表れる喜びを味わうことができるであろう。この色棒を使って一緒に遊ぶことを通して，それぞれのすばらしさに気づき，これからも意欲的にさまざまな人と関わり合おうという意欲を高めていきたい。

(2) 活動内容と計画（全10時間）



(3) 活動の概要

活動日の日直に司会を任せ，自分たちで活動を進めていくようにした。色棒で遊ぶグループは，縦割り班とし，遊び方は各グループ・各個が自由に考えていった。遊びにはできるだけ制約を加えない方がよいと考えたからである。

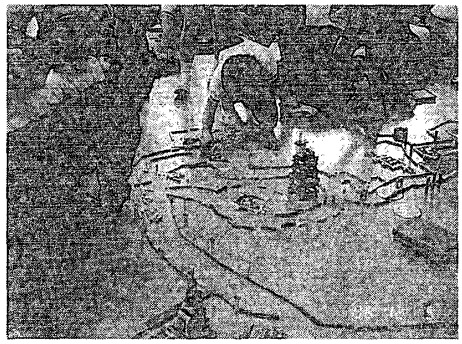


１回目。個人が色棒で自由に遊んでいた。きれいな色棒を順番に並べたり，高い塔を作ったりして時間いっぱい色棒遊びに没頭していた。１年生の中には，いっしょに作ろうと言うお姉ちゃんの誘いにも振り向かず，自分の作りたいものを作って大満足の子もいた。同じようなものを作っていても，高学年の作品がより緻密なものとなるため，低学年の子には，とてもよい刺激となっていた。また，高学年の子も「みんなでこれをしなければならない。」という気持ちがないので，自分のしたい遊びを楽しむことができていた。

２回目。班の色棒を合わせて大きな作品を作る班が多かった。一つの高い塔を作ったり，プール

や花壇のある家を作ったりしていた。最後の振り返りで，楽しかったことや今度してみたいことを発表し合った。

3回目。複低も複高も色棒遊びをとても楽しみにしていた。そこで，当初の予定より時間を長くとり，ゆったりと活動に取り組めるようにした。活動のめあてで「みんなでひとつの街を作りたい。」という意見が出た。それから，全員の色棒を合わせて家・城・塔などを作る子。それらを道路でつないでいく子。みんな自分たちのアイデアを生かしながらひとつの大きな街を作り上げた。完成後，展望台に上ってどの子もうれしそうに街を見下ろしていた。



1年生のあのねより

きょう，ふくこうのおにいちゃんおねえちゃんたちが，いろぼうをもってきてくれました。それで，おしろやまちなどをつくって，みんなのいろぼうをつなげました。そして，みんなのいろぼうでつくったぶんをみました。それで，みんなつながっていたので　びっくりしました。いちばんすごいのは，七はんのぶるどうざあが　すごくがんじょうにできていて，ふくこうのおねえちゃん　おにいちゃんたちは，すごくじょうずな　くるまやみちやいしやすななどをつくっていました。ふくこうは，どうしてこんなにがんじょうなものができるのかな，とおもいました。

5年生の振り返りより

私は，この「色ぼうで遊ぼう」をやって低学年との交流がとても深まりました。1回目は，自分たちと色ぼうで遊んでみました。2回目は，班全員と東京タワーを作りました。みんなの色ぼうを合わせて，みんなで声をかけながら作りました。3回目，これが最後です。この時Nさんが，「みんなの色ぼうで街を作りたいです。」今日は2時間なのでそれもいいなと思いました。そして，作る時，TさんとYさんたちといろいろなものを作ったりして遊びました。他の班の低学年と3人仲良くなれました。見てみると，みんな何人かと共同製作をしている所もありました。私は，みんなも楽しく作っていたんだろうと思いました。私は，終わりの時間になって，もっと他の人たちとも遊びたかったと思いました。そして，いちばんうれしかったことは，1年生の女の子に会った時，名前をよんでもらって手をふってもらえたことです。私は今度またこのような機会があれば交流を深めたいと思いました。

(4)　振り返って

色棒という活動を設定したことで，学年を越えて活動に没頭し，他との関わり合いを深めることができたと言えよう。多くの感想から，関わり合う相手を広げていこうとする意欲が感じ取れた。

4　成果と課題

◎「遊び」の要素を取り入れた活動が，自然に他と関わることのできる場になっている。

◎総合のねらいに迫る「遊び」にするための内容，場面設定，教師の支援のよりよいあり方が，手探りながらつかめてきた。

◎振り返りにより，自分自身を見つめ，他の気持ちや個性に気づいたり，もっとよりよい活動にしていこうとしたりする思いを生んでいる。

◎親子での取り組みが，保護者間の交流や連携を育てることにつながった。

○担任に加え，専科教官の特性も生かした活動も考えていく。

○マンネリに陥らないような振り返りの場の設け方や振り返りの充実を図る。